



そして今日も世界は晴れる

\*ソシテキョウモセカイハハレル\*

\*\*\*\*\*

園生 青太郎

そのう せいたろう

-----

TK電力 蓮見営業所勤務。

サービスセンター 保安部所属。

入社5年目。

切替担当。

高校は才賀の後輩にあたり、愛由の先輩になる。才賀とは入社後、OB会で知り合った。

元気のいいタイプ。どこか抜けているが憎めない。先輩からは可愛がられている。

ぼやぼやしているが、頭の回転は実は結構速い。

友達が多い。

渾名は「セイタ」。

元野球少年。今でも時々会社の野球部に参加する。少々体育会系が入って居る。

170cm。

\*\*\*\*\*

雨宮 東

あまみや ひがし

-----

TK電力 蓮見営業所勤務。

配線課設備設計部所属。

入社10年目。

才賀の同期。

眼鏡が似合うインテリ派。

にっこり笑って人を切るタイプ。理論派かつ策略家。

なにに対しても器用で、要領がいい。

一人暮らしが長いので、家事もできる。パソコンにも強い。

181cm

\*\*\*\*\*

八角 貴義  
やすみ たかよし

-----  
TK電力 蓮見営業所勤務。  
サービスセンター 保安部所属。

入社14年目。

青太郎の職場の先輩。

切替担当。

雨宮と園生の関係を知っている。

雨宮とは別の営業所で一緒だったことがある。

173cm

\*\*\*\*\*

酒向 志都美  
さこう しずみ

-----  
TK電力 蓮見営業所勤務。  
サービスセンター 保安部所属。

入社13年目。

青太郎の職場の先輩。

当直もこなす、1児の母。

地中線担当。

通称しずちゃん。

\*\*\*\*\*

入ヶ谷 春志  
いりがや はるし

-----  
TK電力 蓮見営業所勤務。  
サービスセンター 保安部所属。

入社2年目。大卒。

なにかと青太郎にちょっかいをかける後輩。ちなみに青太郎よりも年上。（大卒なので）

185cm

なお、

「この物語はフィクションであり、実際の名前・団体とは一切関わりがありません」

※純粋な小説の内容以外についてのご意見・ご質問にはお答えできませんので  
... (汗)。

あと、関係団体に「こういうものがあるよー」と知らせるのも止めましょう(T-T)。

そして今日も世界は晴れる

### Series 1



「セイタ、机の上のもの片付けて」

パスタの皿を二つ持った雨宮の両手はふさがっている。

園生青太郎（そのう せいたろう）は慌ててローテーブルの上のものを片付けた。

旨そうな湯気を立てるパスタからは、独特の酸味が漂ってくる。雨宮が得意とする、トマトソースだ。ホール缶を煮込むだけだから簡単だと器用な男は笑うが、黒胡椒の利いたこのソースが、清太郎は大好きだった。

「チーズかける？」

「うん」

キッチンから粉チーズと飲み物を持って、雨宮は再び戻ってくる。その頃には、勝手知ったる他人の家...青太郎もフォークとコップの用意をしておいた。

「ありがとう」

銀縁眼鏡の奥、色素の薄い瞳が笑った。一見優しそうな表情だが、結構この男は食えない。なにしろ好きなものは『策略』と公言してはばからないような奴なのである。

180cmをやや越す身長は、日本人の平均身長をかなり上回るだろう。特別な運動はしていなかったらしいが、何事に対しても器用なこの男だ、大抵のスポーツはそつなくこなすに違いない。

「いーにおーいっ」

その雨宮東（あまみや ひがし）より5つ年下の青太郎は、彼の会社の後輩に当たる。尤も、部

署が違うため直接指導したことはないが。

「冷めない内にどうぞ」

今年入社10年目を迎えた、TK電力株式会社の中堅所はそうやって皿を勧めてくれた。彼が最近よく使うこの深めの皿は、ふたりが付き合うようになってから、近くの雑貨屋で買ったものだ。青太郎が見つめて、雨宮が気に入った。

「おいしい。一料理も上手いなんて絶対詐欺だよなあ」

「人聞きの悪い。誰が詐欺師だって？」

「十分通用すると思うけど？」

「一そういうやつには今度からなにも作ってやらないぞ？」

「えっ、やだ！ うそだってばっっ」

雨宮の台詞に、青太郎は咄嗟に恋人を見上げる。

だが、返ってきたのは、左手によるデコピンだった。パチンと音はしたが、殆ど痛くない。

「冗談だよ」

「...いじわる」

恨みがましく呟くと、「最初に言い出したのはおまえだろう」とさらりと流されてしまう。ちえとふてくされたが、毎回のことなので雨宮は取り合ってくれない。仕方なく、青太郎も食事を再開した。

ソースを作る傍ら、手際よく茹であげられたパスタはちゃんとアルデンテ。会社の近くにあるパスタ専門店よりも、よほど旨い。雨宮はその店の味が嫌いで、青太郎が職場の先輩に連れられて食べに行ったら、顔色一つ変えずに「味音痴」と断言してきたほどだ。だが、その後、彼の部屋に行ったら今日と同じパスタをご馳走してくれた。あれが、初めて食べた雨宮の手料理だ。以来、青太郎はあの店には行っていない。

店を出すほど凝っているわけではないが、雨宮はサラダまで用意している。一人暮らしをしていると野菜が不足がちになるから、なるべく気を付けて食べるようにしているらしい。

雨宮は、実家が地元にあるにも関わらず、営業所の近くに一人暮らしをしている。青太郎の年には独立していたと言うから、その歴史は既に5年近くになるということだ。

青太郎も実家はこの辺りだが、入社以来、寮生活をしている。新入社員の一年間は『共同生活で協調性を養う』とかいう会社の方針で、男性社員の全員が寮生活を余儀なくされるのだ。尤も、生活場所が変わるだけで、特に私生活に口を出されることはない。寮生活が義務づけられているのは一年間だけだが、自由を満喫することを知った者たちは、そのまま実家に戻らないことが多い。

大好きな胡麻のドレッシングがかかったサラダをつついていると、「セイタ」と呼ばれる。本名を省略しただけの呼び名だが、青太郎はこうやって雨宮に呼ばれるのが好きだった。

「来月の旅行、どこに行きたいか決まったのか？」

「さっき、パンフレット見てたけど...」

「どれ？」

「それ」

食事のため、机の上に広げていたパンフレット類は揃えて床に片付けてしまった。青太郎は、その中から一冊を抜き出す。

「はい」

渡されたのは、全面が深い青色に印刷された一冊の薄い本だった。旅行のパンフレットというと赤や黄で配色された賑やかなものが多いのだが、その一冊だけは落ち着いた色で、どこか神秘的な雰囲気醸し出していた。

表紙の文字に目を走らせて雨宮も納得する。

「石垣島、か」

「そう。その写真見たら、一目で気に入っちゃってさ。ダメかなあ」

「俺は良いけど、なにもないところだぞ？」

沖縄ならまだ多少の娯楽はあるかも知れない。しかし、石垣島となると...。雨宮の中には『日常の疲れを癒しに行くところ』のイメージしか浮かんでこない。静寂を愛する自分ならともかく、とても青太郎向きではないだろう。姉が一人と両親祖父母の元で育ったという彼は、とにかく賑やかなことが好きなのだ。

「俺はその海が見られればいいよ。それになにもなくたって、雨宮さんはいるでしょ？」

それだけあれば十分。雨上がりの空みたいに、青太郎は屈託なく笑う。

不覚にも、雨宮は年下の恋人の笑顔に見とれてしまった。

いつまで経ってもお子様のくせに、不意打ちでこの青年は雨宮を翻弄するのだ。

いきなり黙った恋人に、なにか変なことでも言ったのかと、青太郎は不安になった。

しかし、雨宮は手にしたパンフレットを返してくれながら、ぼそりと耳元で囁いたのだ。

「ーそれは向こうで期待してるってことかな？」

低く甘い雨宮の声は女性社員の間でも「イイ声」と評判が高い。普段の声でも十分に色っぽい

のに、わざとひそめた声色にはそれ以上の効果があつて。しかも言外に夜の秘め事すら匂わされて。

「なっ、なっ...」

なにを言うんだ、という短い言葉すらまともに喋れない。青太郎はそれくらい動揺してしまった。

真っ赤に染まった青太郎の首筋を見て、雨宮はしてやったりとほくそ笑む。人を翻弄するのは好きだが、されるのは嫌いなのだ。だからこれくらいの報復は彼にしてみれば当然なのである。

硬直してしまった青太郎の頬に軽く口付けを落とすと、雨宮は何喰わぬ顔で食事を再開した。

「ほら、冷めるぞ」

あくまでも冷静な恋人の台詞に、青太郎から罵声が飛び出す。

「このエロオヤジーーーーッ」

力一杯叫んだのだが、馬耳東風。雨宮はにやにやと笑うばかりで相手にしてくれない。

そればかりか「叫ぶと疲れるだろう」とお茶の入ったグラスを勧めてくるのである。この男の精神構造が青太郎には理解できなかった。

すっかり疲れ切った青太郎は、「もういい...」と仕方なく自分も食事を再開した。いくらこの男が気に入らなくても、食べ物に当たるのはよくない。

少し冷めたもののやはり雨宮の作った料理は旨い。ちょっとどころではなく悔しいが。

とりあえず食事の最中は口をきいてやらないことに決めて一また何を言われるかわかったものではないからである—青太郎は黙々とパスタを口に運ぶ。

そんな青太郎の心情を察したのか、雨宮もそれ以上からかいの言葉を掛けてこようとはしなかった。

お互いが口をきかなくなってどれくらい経ったのか。

ちらりと青太郎は恋人の姿を盗み見た。さりげない仕草だったはずなのに、なぜかばっちり雨宮と目が合ってしまう。

それでも無視して残っていたサラダを片付けようとするのだが、先に食べ終わっているらしい雨宮の視線が気になる。だが、こうなったらもう意地だ。青太郎は味のわからなくなったサラダを必死で口に押し込んだ。

しかし急ぎすぎたのか、食べたものが喉に引っかかった。途端に激しく咳き込むことになる。雨宮は苦笑するとグラスを差し出してくれた。慌てて受け取って半分以上残っていた中身を飲み干す。

「まったく、そそっかしいな」

「誰のせいだよっ」

「さあ？」

「にくったし——っ」

「随分だな。俺はセイタをこんなにも可愛いと思ってるのに」

言うが早いか雨宮は青太郎を自分の腕の中に引き寄せる。

後ろから抱き込まれる形になって青太郎はじたばたと暴れるが、力は雨宮の方が強い。元野球少年だった青太郎と違って特定のスポーツをやっていたことはないらしいが、この馬鹿力は一体どこから来るのだろうか。

すっばりと雨宮の腕に抱かれることになって、青太郎はようやく暴れるのをやめた。

「馬鹿、意地悪、エロオヤジ。大っ嫌い」

その代わり子供のような罵りの言葉が飛び出してくる。

雨宮はすっかり拗ねたらしい恋人に、優しい口付けを送ることであやした。

脱色はしていないものの明るい栗毛のやわらかな髪に。怒りか羞恥か、桃色に染まった頬に。

そして止まることなく悪口雑言を紡ぐ唇に。

「ん…」

顎に指をかけ、少しだけ後ろを向かせる。体が辛くないように、腕の中で体勢を調整してやりながら、雨宮は愛しい恋人の唇を堪能した。

「…ふっ…ん」

触れるだけではとても収まらなくて。

深く舌を探り、濃厚な口付けを与える。青太郎は雨宮の腕に指を絡ませ、大人しくその接吻を受け入れた。

何度か角度を変えて、十分に恋人とのキスを楽しむと、ようやく雨宮は青太郎を解放してやった。

腕の中で体勢を変え、向き合うような状態になった青太郎はこつんと、雨宮の方に額を押しつけた。

普段は小生意気なくせに、こういう時だけ青太郎は甘えん坊になる。年上の男として、そうやって甘えられるのは嫌ではなかった。いや、寧ろ歓迎していると言っていい。

「セイタ」

愛しい気持ちを抑えられなくて、雨宮は髪や額に触れるだけの小さな口付けをいくつも落とす。

「可愛い、セイタ」

「もう、いつもそうやって...!」

「本心だから仕方ないだろう」

くすくすと笑って雨宮は、耳元にも触れてくる。擦ったくて青太郎は雨宮を押し戻そうとするのだが、そのガードをくぐって雨宮は何度も青太郎の弱い場所にキスを仕掛けてくる。

「愛してるよ、セイタ」

「...雨宮さん」

飄々としていつも掴み所がなくて。本心がどこにあるか分からないような男なのに。

そうやって甘く囁いてくる声音は、彼が本心から青太郎を思っていて居てくれることを告げてくる。

青太郎は腕を伸ばして、雨宮の首にしがみついた。雨宮は優しく抱き返してくれる。

「明日、旅行会社に行ってくる。俺もセイタと一緒にあの海が見たい」

そしてその後は、青太郎と一緒にいてくれさえすればなにもいらぬ。

茶化したところの一つもない雨宮の申し出に対する青太郎からの返事は、まだどこか拙さの残る口付けだった。

数え切れないほどの口付けの合間にふたりが見たのは、どこまでも深い海の蒼だったのか、澄み渡った青空だったのか。

だが、お互いを確かめ合うことに忙しいふたりは、やがてそんなことは忘れていったのだった。

END

Maya.Tendou

2001.5.5

はい、新シリーズ開始です。

キャラの雰囲気とかは割と早くに決まったんですが、台詞回しとかが定まらなくて苦労しました。

特に雨宮。インテリ男っていうイメージは最初からあったんですが。

うう、いまだに口調はどうも掴めない…。

青太郎は最初の設定よりも幼くなりました。おかしい。こんなはずじゃなかったのになー。

まあ、おいおいこのふたりのキャラが掴めるようになればいいなーと思っています。

社会人×社会人を書きたくなかったので(^\_^)

しかし今回は全然社会人らしくないですね。会社員っぽいものも書いていたんですが、今回は没になりました。その内書きたいです。設定だけは色々作ってますからね（笑）。

では一発屋で終わらないことをお祈りください(´\_`)!チーン<洒落にならない…

それから、このキャラクターをつくる時に、命名でお世話になったひだかなみさま。

どうもありがとう〜♪

セイタと雨宮は捧げます（笑）。